養老院より大学院

内館牧子（文学研究科人間科学専攻宗教学専攻分野）

本書は、五十四歳で東北大学大学院に入学した著者が、自身の二度目のキャンパスライフや社会人大学生のすすめを述べたエッセイである。著者の大学選びに始まり、受験、入学、大学生活、学会、修了、その後を通して、社会人になってから大学に入る意義が語られている。大学生になることで得るもの、失うものをバッサリと教えてくれ、社会人で大学に入り直そうと考える人が読めば、啓発されることも再考を迫られることもあり、楽しい読書になるだろう。しかし、現役の「若い学生」が読むと、そもそも現役大学生のうちに学び、遊び尽くしておかなくてはならない！と、著者の充実した学生生活に、無駄に焦りを感じさせられる。勿論著者は著名人であり、だからこそ可能な余裕のある社会人学生生活だと思うが、それにしても、学びへの（もしくは単に大学生活への）情熱がなければ不可能なことである。それくらい社会人になってから大学生をやり直すことは困難である、つまり、現役大学生のうちに、なんとしても学び、遊び尽くさなければならないのである。そんな当然のことを突きつけられる一冊である。

また、本学のキャンパスをはじめ仙台市内の地名、さらには一般教養の講義でお世話になった学生も多いであろう鈴木岩弓教授等の名前も登場し、現役東北大学生が読むにはまた違った面白さもあるかもしれない。（講談社文庫／¥533／担当:灯子）

次は59ページ